

貞標
節義

松村喜彌著
明治

烈痛傳

第一卷



柳田文庫

文庫11

A1746

10

15

20

25

文庫 11

A 1746



文永堂



貞探 節義 明治

烈婦傳



著小著ま明治烈婦傳へ小書心貞探の二箇を首とし
 集め彩の物語りもまた選り歌の中へ人の後をたぬれ
 多かり夫を著者が感嘆の餘り撰抄のまを記せ物もれ
 ば後人吾れを云々大方いさつ一五ひ後中へ故人ありぬ
 傳記なりといはれぬ著者が意外に出る行ひありて陰ふらぬ
 る事なきも手い他初の人よこそ依るべき事なり
 とて先づこの傳記一着の眼とて後世に傳へるべき事なり
 教州素の足業のそとと描きまをび玉の紙の

平時明治十四年春二月

櫻雨主人題

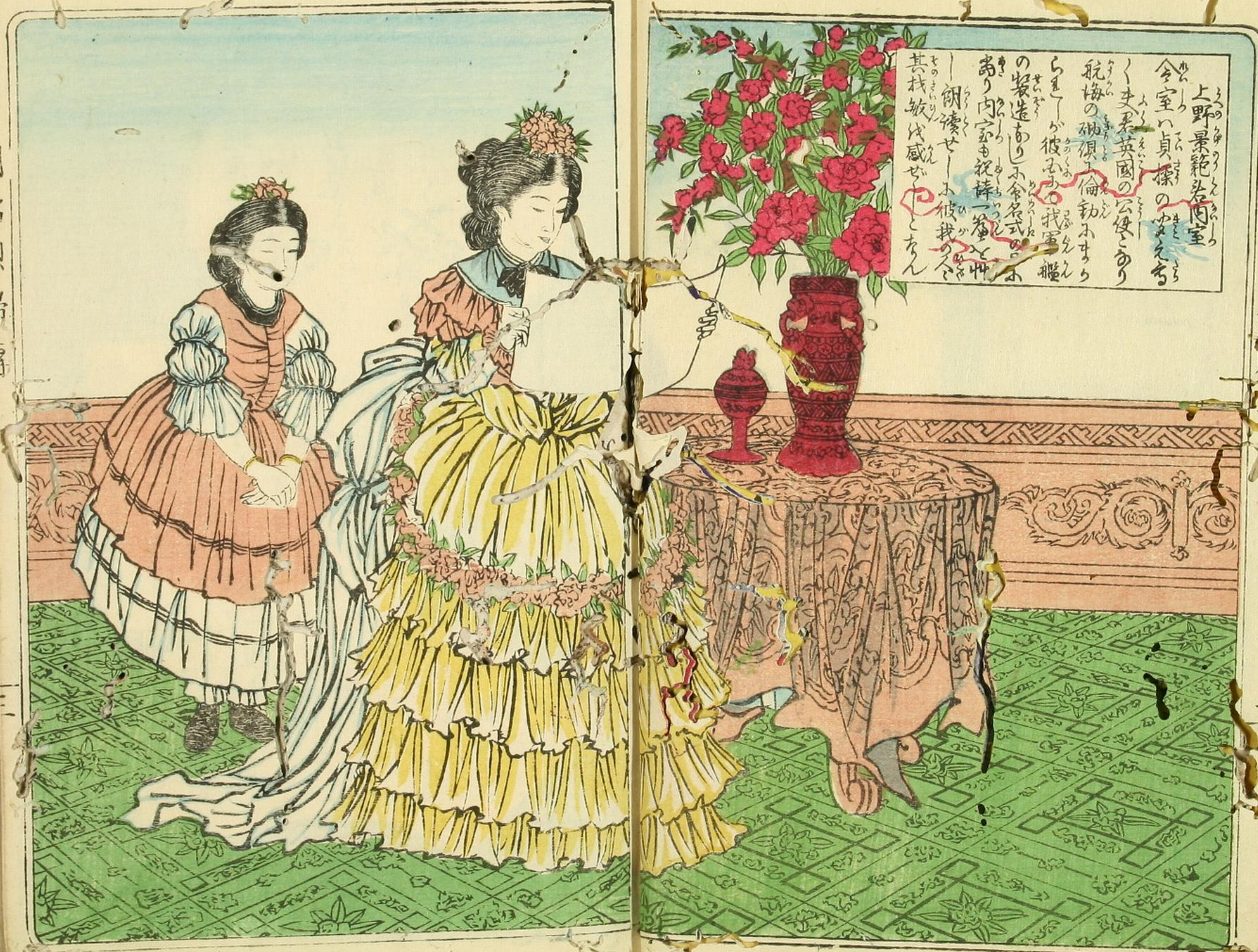
古雄書





つらき心も
清くふきとせ
とてはねて
あはれさへ
舞

上野景範翁内室
 令室の貞操のゆえに
 くま英園の公使あり
 航海の便に倫勃不す
 らまか彼ふあ我軍艦
 の製造あり不命式のふ
 あり内室も祝辞一巻と
 朗讀せし彼我の心
 其技敏代感せしとん



孝の百の基とつる機
小室たる哉始終全せむ
天人必老星と憐むべし
伊豫の玉物の内村の者か
里母と四個あを罷むり
まどく暮せし小母の
十軍系よりの新病あを
始終病ひの床小お坊
りるや兄弟の者孝心
あふし能く老母あはえ
一或日二個のおるふひ
母の病危し竹らんし

海の内村より下りて
由良山小石控の非社を
あふし能く老母あはえ
どまより香のふる夜も
雨の目由まぶゆやね夜
込て同春をりあがざりや
あふし能く老母あはえ
通ふの怪しとて迎査
不見覚められし
あふし能く老母あはえ
個の者心せふ願をれ
あふし能く老母あはえ

雲雀
春の門
その名も雲の
うへにゆゆる
久門甚六郎好貞女



秋の蝶
久門甚六郎妹雪女



昔も通子八山知和藤冊
の満造志を思ふ三存の姉妹
なり天性孝行ありて能
く父母小使え日所垢某
が伴へ入嫁せし小使の死
去より一より実家へ返
りて後再縁を断せむ
其母と慰む儕和壽と稱
え迎候芳拙翁のつゝ入
りて歌合中よ小使をとり

多作の大坂府下藤摩
堀守橋某が娘なり幼
より父母小別れ回家
より橋を渡ふ育ちまれ
生長せしぐ學業の才ふ
秀を名高く又西南
の彼小餐餅や奪り而
門の筆伐まじり世軍用
小献せんし府廳あま
面や望げしりあり
志由まじり感賞せけん
やけ果僅ふ十九才あり

月 台 川 掃 傳

吉岡通子



雪の裏に
岩も砕く
春のあけぬる

若と云ひ

河原

教

父母

あま

浪速江の

高橋多作女



梅子の旧屋間後相合元
善の女あて九山依未が
妻とあつて一かまの勢
長安ふて開拓所一法の
御罪とて懲役とあつて
やがて長湊女学校の教師
となり夫の罪を宥めん
と百折せし甲斐あつて
終不宥預けの寛典を蒙り
も偏不梅子が誠心より
政弁あもあされみまひ
一而已の勢後佐木氏
の非なる勢西の官吏
となり過去の魂をさ
すむまこととぞ

きよ代如の西の隆盛の妻
あり姓賢温柔ありて
能く変ふ仕取て善兵
と好まを隆盛陸軍大將
不任せられし時昔日の
如く善兵と有と一家
政代乱さば西の役女
際と指揮し武名城
顯せしが收軍の後回舎
ふ引き籠り造子と養
育とせしむ初むるの
実小雲女とすべし

丸山梅子
 後れごも
 通ひて
 夫の
 託
 伏せ
 善兵たよ
 と地の神



西郷轟代女
 後れいん
 夫木を
 て朽
 秋
 伊の破らるる
 おきみお床



川尻豊女
 世をなせし西の戦ひ
 起り川尻も戦軍の屯成
 一願守りの金襴を結
 去ふ再び友軍の屯と代り
 一時絨より返る金襴
 一り七客新たりと價安
 一平津も送り返る金
 一と送りなく官軍の力不
 一此の拵は 一は信候と候
 一と見え

川尻豊女
 世をなせし西の戦ひ
 起り川尻も戦軍の屯成
 一願守りの金襴を結
 去ふ再び友軍の屯と代り
 一時絨より返る金襴
 一り七客新たりと價安
 一平津も送り返る金
 一と送りなく官軍の力不
 一此の拵は 一は信候と候
 一と見え

川尻豊女

書き送る



その
 茶の
 心持毛残
 法眼ぎく苗たる
 紗が業かな

三芳や関女

散かる



花の
 衾の
 将森の
 爰ねらるこのまじ
 去乃音

松女ハ阿物徳高の士族素
 の女たりあつて其の
 の技操三本案が作の
 下婢となり一或日西
 敵の抜刀隊なりと云五
 六名の破戸物乱入一
 盆盤と槍乱一手中餘
 一と松の彼の曲者
 と戦ひ遂に死押へし
 不道查由出流河ししが
 中勇往背の板額巴よ
 由はまべき働ふきあをん

時ハ大分おや其後大分
 全宮西之町の士族田川脩
 他の妻あり史籍病不羅り
 終に後骨や折き出たりな
 らざるや病者の御ふま
 せ車小車せ長崎の名医
 と或い其後の清心公へ奉
 信をさし一わ能く生元
 死に後八軍交ふ其の
 東なきふより其業と
 一々金三内や揚らんこ
 甲まきり田舎小若女忍
 の類多し部下の稀も
 愛へるの可謂僕仆の仁
 小進きの所おならん

鳴門松女



効に
 かりそあれ
 名
 きん
 言砂の松の
 名の道が名に道ひつ

田川時女



小車乃
 如
 善の
 加たる
 変らぬ毛や
 青柳乃系

吟の禍の門と故人の戒め
 宜なるべし 唾あてて衆
 婦小務りするあり 既し
 備保の三河の玉富村の養
 妻木某の二女なり 生れ
 ながら 唾あれども志ざ
 ぶつて 優し 是夫婦の
 厄害となりしが 文久二
 年 兄夫婦の小児二人と
 一死 去せし 浅きいれ
 や 養育し 十八年のる
 日 宿や かねて 縁き 一は 小
 感 ぎ べに 者 たり として 政 府
 より 賞 賜 せ 玉 たり し とい へ



葉の赤糸 秋の糸 赤糸 赤糸
 樹の娘 妹 小 白 菊 と 心 ち
 れ 一 が 本 花 花 葉 振 舞 の
 足 記 人 冷 風 八 と の 者 小
 思 ち れ 互 小 儀 や あり っ
 妙 作 と い たり 一 っ じ 哉
 八 い ま ぶ ぶ 才 代 や 持 ち
 一 っ じ 哉 葉 の 思 ひ 起 っ
 本 花 葉 小 菊 不 庭 々 哉
 き っ っ 小 菊 葉 一 今 っ
 巨 葉 の 今 っ 葉 一 っ っ
 葉 の 使 害 の 風 吹 り 今 っ
 葉 扱 い 御 害 々 憐 々 我 身
 々 更 小 飾 ぎ っ っ 婚 妓 中
 の 宿 光 の 玉 っ っ っ っ



月夜系如傳

安の信物依久野中込村
の者なり 三平とよ者の
妻となり 舅姑小娘は仕
えの治十二年男の七十才ふ
と姑の十九才ふに死すや
強く給さ此上へ妻の更交
善四奔や味び向く者善
せんことと三平と待りし小
屋の形に兼て軍務を好
まけりや安のちふれ
の軍務を似ぬ慰さむる
なんどや心の孝業ある
小人成倍り候とたん

兼の信物依久野中込村
姓末濃木且の善類の
えさくは西の西と候
肥後にて戦ひ終ふ討死
たせしやいふ多原くその
送骸や麻見崎の地小葬
軍後肥後路ふお出づる
仇や復さんと西の小従
軍や頼ひしと原く
遠くへ陣さかりしや
是能なく故や小娘しゆ
まの勇婦と云可なりん

つちや
大屋安女

其親の

好む物

のら

ま

百勝よ少小

優しむ



志のちら
篠原兼女

招き

廉く

見せし

秋の朧

尾花

命かりけせ



月夜系如傳

芳い加来後平とを然り
 津浦村の古族の女なり
 一が日暮横田正雄と交
 婦の物となしるるれ
 其小睡くくひし
 正雄の非風堂のを個
 事波れた後ち自宅小
 て扇後せし小芳の想
 みの餘り佛の小入り
 ふ引き籠居死人の菩提
 せのこ思多れ祈り交
 小志ぎしと愛おさる
 事

宮の群る初小位君植木
 村の農坊お舟の長女なり
 父の八才ありて戀殺の
 能とたりしが宮を思ひ思
 しみ小娘お此程坊を舟の
 病氣なるより若る何し
 りが何とぞ父の看病致し
 たきし目と岩泉の戀殺
 不へ遠き路と涙をを
 せし小志志ぎしと感
 せしれ宿帳けとたり
 一もさやが考りの
 くとやのふとさ

加来芳女

あぶたのこ
 衫し物
 袂風を
 珠めた子
 吹や
 通せん



植木宮子

何れ
 解る
 春内薄氷



七人の備前のふはる郡全
 川村の平民小林作之書
 たり父の目玉赤坂村の
 卯善を丸新といふ文之三
 軍非之の書とあり一が
 史が身持真一とむせ家
 内小あつこの稱なる小姑
 小能く孝養をこし一史
 の能く後あゆ人小せま
 家子とすり一軍軍
 小衆女の龜鑑とゆふ
 登き若かりとて堂場
 の川はあり一とありん

香川とて大和の公野下村
 苗室村の最末の女あり
 二十つ才の美河内の玉の家の
 村香川重郎がまるとなり
 小三十六ありまふ死か
 せくる時偶ふ死をんせ
 一後留められぬあ解
 一と書一尾法師となり
 大坂野波村小住めり
 糸の附籍とありその
 小のり小菴や結ひ
 房初経の書終る
 何とさる一空のふ

小林初女
 香川社女

小林初女
 神掛く雲らぬ胸の
 まは比鏡
 うのし
 怒りて
 人あはせせむ



香川社女
 常の経よむ
 後めむづのま
 月
 ねお
 せ
 経教乃爰



月台思婦傳

明江烈如作

ちあいの柳川の旧古族十時
 主助が妻なりーガ治十
 年法い助死去ー後子
 勇た弁と養育ー柳川
 借習学校へ通学を自ら
 借小通い教授の時い侍
 あつて之と暇明ト暇りて
 へ勇た弁へ再び教へて教
 育行き届り教習と空し
 あより 和應よりちあ
 小綿一行勇た弁へ地理
 書を贈賞ありーとあん

いそい大坂府下西遊地
 年助と勇た弁とあふあ
 るがま多病おいて高し
 小如る事の籍帳たうし浅
 のをい七たをあや大章小着
 病ー自ら勇た弁小如り
 知くの業を仕入れ之と
 ひて賣り安行ふ人皆は
 実を常ーいをかあふし
 行て争ひ求めける種よ
 今い考なる身とあふし不
 天姓慈業の心深く貧者
 と賜くよあふしとあふし
 金く名標の奇標をんん

十時知貞女



教(ま)の
 や
 里
 賞えり
 養乃子

天野孫女



谷せと
 浪速め
 街
 歩
 魚の
 和舟
 酒
 美
 鯛

月名川集傳

常子 神奈川郡下久良
 形大屋村の蔵あり
 二人の子供や
 ら能く
 如く
 せし
 抱し
 里怒る
 歎き悲し
 女
 女

近江 藝者や猫と
 ある人の
 むす
 由ある者
 新撰の
 業の
 銭
 たり
 せ
 接お
 承受
 あり
 め
 れ
 者

小透常女

焼火

わのぬ

歌

なり

雪

柘焼く



紀伊 團楼 あり

濁り江乃

蓮戎



鏡

雲ぬ

君や

治の藩邸に下葛餅が女
 町の發職橋本宇吉が女
 至天姓孝が父と親を
 さんりや来しとせし
 何分貧困なるふいふ減
 て父と恥はんと思ひ子
 やり公方や一が下後由
 と溢るる車なきあまも
 感ト折し小きひして忠
 む徳や蓄わら父を送り
 酒肴の料ふなき一わ
 一ハ又少女あゝ感ぞ
 涙き者なとんや

友友七の二女なり
 痛れの後ち後て父の病
 と僅小十四支のし女な
 困窮中や人ふ存たれ
 貸せんあて父が業と求
 三々軍子の着病小全使
 せしと人々感せぬいを
 が輝ハ先軍ふ身持あて家
 ぬとあ一悔涙の産の
 あうく妹が孝けせし
 とすき身の不孝を
 と船ト海中ふ身を投
 トて死せりとらん

橋本英森女



親の
 思ひ遠く
 遊びあねつ

國友鶴女



親の
 思ひ遠く
 遊びあねつ

道子へお返しのお返し
 田代福と願せし家老
 の後室なりし中子と
 文武の才とたさんと母
 精ふ音巻し御ふ毛利
 氏谷屋とぬれし一子の
 幸個客戸素とて徳右
 の際必ふ帯き名と髪
 一由縮小道子の教そのの
 眞きふ依る物なり又た子
 いはふ和奇と好みて秀
 仙も字しとちん

らん女の教習お返し
 福井町の士族岩生茂の書
 たり幼雅時より学みしを
 好むむも待画と善む茂米
 小ふ留學中秘札のよし
 ても信ありしお悪款の條
 至時長うれとの音と傳せし
 たり後ち再縁と結せし
 後井女学校の教師となり
 掲立身と立てま君の家
 名と能うしあざしハの活
 鳴女の寺個たりり

岩生道子
 雅が電城
 かぎり
 らん
 善風小
 垣根うのり
 岩の梅の香



岩生蘭女
 長かまは
 祈のし
 今毛子
 草の
 跡や
 めんろらん



約の西京府下伏見深州の
 陶器師五郎吉が長女なり
 父母は明治五年申死ふ果
 て一と生才の十三の乙女
 ありて才女として優り
 五才ふたると憐れ自ら
 陶器を化りてとて陶器師
 内親族の助と乞ひて依
 然とて一と家名を継ぎ
 才の感心小娘とて少女
 小て且つ和音と好む
 式部乃自のつ小在りて
 その名を継ぎ

梅の西京府下伏見深州の
 夫は十五年前より大為小
 病の病をたしものなる過ぎ
 や小梅の夫と大切小者
 獲一朝夕非似小折世言
 梅のつ積年廿ふ為とて
 中一の徳まき小感
 べ一少女き時より登向と好
 且つ能くま向其角堂
 の小はつて秀白結小字

深系約女

瓦焼く煙ハ

結おれ 軒小

くも

まやき

深系

里



抛賣の梅

常や

みり

解く

有

の

梅に

癒る



見... 如...

孫の系系... ありて... 衆家の... 母小送り... 乙女あり... 情お裁... 病ひふ... 〇子種有...

大徳の... 昔... 物... 切... 工... 小... 西... 島... 其... 月... 尾...

月... 尾...

申田孫

おぬまて

子... の

猶



哀れ雨... 花

大活尼法... 呼びか...



尾...

見世女

ついで遠野城を那形田村
の農山や借十斎が常おやり
父八田山は茶村の松林松右
出のとのみ夫両儀とも不病
ひのか小唄れ一かつとさ
続きのまゝさうく医察の
くれとむせやせし一由甲斐
たきと今のふかとも解る
まどと暇を暇を不勉
強一夫と夫事ふを採
やう一子友友の長
やう一みふ屋と堅固
み福ふやめて近や婦女
の境たりとつとが居
る

富の渡海志を那形田村
の平民松木五郎の長女
あり父の先軍より
あつ小唄ひく母申張満の
あひ小唄り弟の渡死常
ををたぐりつとあり 雨歌の
看病ふをりなり由相の
耕化ふつるま心乙女の
あつあつあつあつあつ
不感心ふ堪えざる者く
た長某より茶心の前
や上申りつとたん

桐島

山下津多



盲香
妻の
採て
ねぐ
ら
めく
牙の憂ふしれ
ねのひた小

鈴木富女



銭がたく
畑の軒小
むま
おま
あるの
ちや
山かげの巻

安子ハ能事無事族を居る
 八の姉たり明治四年阿部
 景器が妻となり一夫ハ
 政府の嫌疑を受け一頃
 刃別ぎる男の入り来り強
 一泊せんとをひける夫
 の命をなれんとて拒絶
 せし其の若の悪口を穿
 き逃げきりけり小桶
 元んと一其より我
 疑を承へるけし小妻の嫌
 疑由を承へるけり一が縁
 風雲子加入り付託せり
 久安子由儀小此せりとなん

阿部安子
 死出の
 旅
 路
 伴
 是
 思
 ひ
 切
 る
 身
 の



福田作女
 親乃
 為
 身
 以
 一
 松
 交
 ら
 及
 志
 子
 代
 も
 見
 せ
 つ
 べ

阿部安子傳

房ハ孝翁玉下宅又海田村
 字水元白といふ所不工平民
 改三の女たり而親小兄弟
 三人の身一たり小父が
 病中母の死り一も身
 一人と煩たり父の有後
 何れこれとなく僅十三才
 みておろ家事を措ひ一
 小父が病もふさか丹精不
 全候せ一ハ編小長き
 年月とあひませせ一
 孝養不ゆるおたりと上
 實不慮一應賞と賜となん

品川樓盛縁
 父の爲小給る横濱新屋橋小
 代登糸が性親の縁ち二代
 の盛糸と名のり全盛郡中の
 並ぶ者なり幼名おとよと云
 白考の海酒をのりてま
 ちや浪舟の運とハ時時や
 一といふ可なりん

藤橋房女

身と細め
 骨我碎
 仕元
 我子
 親乃以のれ
 思をん



品川樓盛縁

蓮
 赤再
 うの家
 月影
 今



あつた 廣島物中 中野小作
 此方族 亦田体 和が 體なり
 素回 廣の 茶及 たりし
 つ時 茶の 葉れ ば 父母
 とも 小太 病小 係り 其 教
 同の 類し 小あ ちの 窮困
 の中 より 替古 なる 或の
 裁縫 の 貸せ せ び して 看養
 養る 茶 なく して 茶 飲
 る 小 天も 憐れ 玉ひ じん 病
 親とも 小 金使 する 小 際
 茶 小 由 又 盥 小 あり
 小 目 せ び 小 孝の しく
 あり 後 小 治 十 年 中 養 賜
 の 血 沙 波 せ び 小 孝の しく

合せ 物ハ 小 なる 物 兔 解 小
 小 人 誰 せ び 小 福 せ び 小 徳
 其の 常 なる 小 支 苦 の 境
 と なる 小 政 事 小 下 階 出
 今 泉 村 農 西 川 養 賜 の 養 賜
 女 たり 故 あり して 離 縁 せ び
 後 ち 養 賜 養 賜 小 水 の 操 小
 養 賜 養 賜 小 身 の 身 と なる 小
 け ぎ 養 賜 小 養 賜 小 再 縁
 一 養 賜 小 痛 小 養 賜 小 養 賜
 し 其 深 切 始 め たり 養 賜
 かり け ぎ 養 賜 小 人 誰 せ び
 感 ぜ ぎ 養 賜 小 養 賜 小 養 賜
 たり 養 賜 小 養 賜 小 養 賜

千回紅茶
 本れ茶養る
 けむり
 て 神
 養る
 養の 養に
 淡雪の 養



西川駒女
 うの 養の 養
 養の 養に
 養の 養に
 養の 養に
 養の 養に



明治系 婦傳

藤の東家深淵西文師の
 和民松本長多米の妻なり
 十七才の時入嫁一子あり
 然し小夫の身お放蕩し
 て家事をせむとせざりし内
 惣身梅毒のたふ腐敗し
 目も閉られぬありぬたると
 解つ麻ふむあく着せし
 小七年を居て死せし一夫
 見るなる華山と称する
 なく終ひひふふと異言
 一々家忍を存在せし
 けり女ありしなり

色かへぬ
 松や
 煎り
 茶の
 中



鈴木長女

富の太極有十餘年所業
 田中重隆の女たり親子と
 人の習う方あり父の十
 七才の時入嫁一子あり
 然し小夫の身お放蕩し
 て家事をせむとせざりし内
 惣身梅毒のたふ腐敗し
 目も閉られぬありぬたると
 解つ麻ふむあく着せし
 小七年を居て死せし一夫
 見るなる華山と称する
 なく終ひひふふと異言
 一々家忍を存在せし
 けり女ありしなり

柴田富女
 杖に
 老が
 月な
 歩くる



杖に
 老が
 月な
 歩くる

傾城の勢をうへに此柳うさ
 搦杖たりとも様をのまき
 登きとりふかへるるは
 霧の切名字と海びき
 舟中お城の重き御用川
 島村の平民を本意の
 云女たり一が又おれ
 のち霧迫の中や自ら
 て流糸の遊女とも
 解放の波ち再び海東へ
 至母や安楽の過させん
 て財を全十円と送りけ
 るふ重孝と全盛な
 る多郭中ふたむき者
 ちり



梅の長の赤い雲彩
 地の藝妓あまの
 杉東の松り枝
 安楽とをり
 倉敷の度病おと
 死去せられし梅西と
 と改め飾を
 此の思ふ庵を
 堅固小佛お供元
 傷たるは法原おらん



巴班額へわうーの勇婦
 たりれども必死の志あり
 あくこつて一へ強女なり
 廉潔の節の士族俣基虎
 其の娘ありて年十七才
 の時同士族へ嫁せしが
 舅姑ふ嫌われ離縁となり
 一折し由西々を起
 きの日女人隠れ跡とち
 重層官宿の抗ト勇
 名を顯せしが西々級
 死の床に候里一ひや
 跡跡や知る者ありと



伊集院網女

長い静寂のまに其の
 一が神宮下嫁き一男
 女を儲けりし夫ハ長病
 少く活け日し死し一も長
 八日夜の假ありしも病き小
 児を學校に通学せしり
 夫く夫小法也るりし公
 願小達一畏くもちの畢
 竟父つる但小遠ひ書い女子
 の能堪ともた者とて各
 全三円定賞一たま
 ころーとちん



神谷長女

ふ士が根の
 意なき
 報い
 似い海原の
 尾つふと

度志の細田氏の女たりしが
 慶應三年申の利生御下甲
 御巨麻郡同村辰内辰内
 右のふ入嫁せし一軍兵終
 び一子を得けしが其
 の古病ありて計の困窮
 なるに於て小出で夕四
 山ありてはるるの草を
 背負ひ蕪藤田府中事
 其の着る衣もさうりぬ
 と近隣の者も感嘆せし
 終つて餓死すも其愛
 りり

新ある
 内藤度志女
 山
 猶余
 星
 月
 赤
 ふも
 赤
 赤



千賀八園防の女は法
 三回三回三回三回三回
 君成雪の二女たりて姓
 孝順ありしは父母
 不仕ありしは富貴賤小
 悲しや孝心の勇強必
 不憚る人無きハ孝の不
 幸とせん且つ舟舟と
 善くする小還てなす
 不題するハ浦の財を
 ふと保めりしなり

六十若千賀子
 一夢成響れ
 とまわに
 啼き控く
 治
 中
 時香
 加



後永越後の花村の太史女
 可系好竹見街道の我ひ
 破也陽玉の後蓋田玉司と
 丹小屠漢を然し小後室ハ
 兼て賢女の吹元方き極
 阿う然く家子や極し遠
 子や教育一矢別つる様女
 種とも滑んく且れ赤や善
 深もとの清幽の枕とし此
 道やりの位相の友とせしる

但し 那打越村の
 衆を好む衆の根二人ハ母
 の病氣の重きを悪し
 葉の重荷破さん小も名
 ありてつとぶるより
 の氏非不誓や掛け面の
 疾風の目も願ひたう凡そ
 二年中日冬一明治ハ第
 の冬大雪の夜燈籠毎ふ
 降し〜送舟不致て吹
 雪の乃わ輝珠とも雪く
 列せ〜ふま〜人源とこ
 かさねのなろりたりは年婦ハ
 十三才妹ハ九才なりしと云ん

月名月日 帚專



蒲田姉妹



見六列如...

松子の婿正三位内閣
頼朝一考本戸公の室
なり始ぬハ系於三本樹
の藝妓たりり一公未だ
母小由たまハさう一日
走り切たるや愛で居ち室
となしたるひいか遊去の
ち善性亦た後ちの山る
と孫ハ明著れ墓系小後
一いひ空閑小なりまぬ
浮世の世よ交りいざい
ちトめよりいほち善く
夕種のははとらん登し



明治十四年六月二日 著述人

板権免許出板人

大 阪 岡 田 茂 兵 衛
同 前 川 善 兵 衛
同 前 川 源 七 郎
同 大 野 木 市 兵 衛
同 岡 島 真 七
尾 州 名 古 屋 美 濃 屋 代 助
信 州 長 野 西 澤 喜 太 郎
武 州 横 濱 池 田 幸 吉
甲 府 西 川 庄 右 衛 門

京橋區南鍋町壹丁目壹番地
松村春
同 區 彌 左 工 門 町 十 三 番 地
武田傳右衛門 輔

東 京 發 賣 肆
山 中 市 兵 衛
山 中 孝 之 助
山 中 喜 太 郎
覺 張 榮 次 郎
大 倉 孫 兵 衛
荒 川 藤 兵 衛
水 野 慶 次 郎
小 林 鐵 次 郎
辻 岡 文 助

010190531509

